

令和2年10月2日

渡辺(ひ)委員

初めに、神奈川県国土強靱化地域計画の中で、特に河川事業の取組について、何点か聞いていきたいと思えます。

私は藤沢市選出ということもあって、藤沢市の主流河川である引地川と境川について、一般質問の本会議でも質疑がありましたが、改めて質問させていただきたいと思えます。

まず、境川の整備に関して、現状と今後の取組について伺いたいと思えます。
河川課長

境川では、平成22年に都市河川重点整備計画を見直した際に、整備目標降雨を従来の時間雨量50ミリメートルから、おおむね60ミリメートルと一段高め、護岸や遊水地の整備を現在、計画的に行っています。

これまでに境川遊水地などが完成し、近年浸水被害は減少しましたが、いまだ整備が必要な箇所が多く残っており、全川にわたり整備目標を達成するためには、まだ多くの時間が必要となっています。このため、現在、境川ではできる限り早期に浸水被害の低減を図るため、限られた区域の整備により、広い範囲に整備効果が見込まれる遊水地やボトルネック箇所の整備を優先して実施しています。現在は、相模原市の風間遊水地の整備や大和市の相鉄橋梁付近の改修工事に取り組んでいます。今後も引き続き、早期の治水効果の発現に取り組んでまいります。

渡辺(ひ)委員

今、境川については整備状況をお聞きしましたが、もう一つ併せて、引地川についてもお願いできますか。

河川課長

引地川についても、境川と同様に都市河川重点整備計画に基づいて、時間雨量おおむね60ミリの降雨に対応するため、護岸や遊水地の整備を重点的に行っています。これまでに大庭遊水地などが完成しています。現在はその上流部下土棚遊水地の整備を重点的、集中的に実施して、今年度中の完成を目指しています。今後も下土棚遊水地の完成に向けて、遊水地を掘り下げる工事や護岸工事などを進め、境川と同様に早期の治水効果の発現に取り組んでまいります。

渡辺(ひ)委員

今非常に重要な答弁をいただきました。以前の時間雨量50ミリ対応から60ミリ対応ということで、それを目指して様々な整備に取り組んでいただいているということです。ただ、そうは言いながらも時間がかかる事業なので、今後、なるべく早急に取り組んでいきたいという答弁でした。時間雨量60ミリという数字が出ましたので、例えば、それぞれの川で今の整備状況が何ミリ対応まで進捗したとか、そういう進捗率のようなことが分かれば教えてもらいたいと思えます。

河川課長

まず、境川については、現状で全川にわたって何ミリ対応とするのが非常に困難な状況です。それは、河川の途中に、今申し上げたようなボトルネック箇所がありまして、そこで対応できる降雨量が、流域全体に雨がどの程度降ったときにあふれ出すかというところまでは分からない状況です。引地川のほうも同様でして、全川にわたり現状で何ミリ対応というのは、なかなか難しいところです。

渡辺(ひ)委員

様々な事業を組み合わせることになるので分からないのだと思いますが、ただ、目指す目標が時間雨量 60 ミリということは分かっているわけで、それについて、どう積み上げていけばそれに耐えうるものとなるのか、また現状はどうなのかということについては、非常に難しい場面もあると思います。この後の質問にも関連しますが、しっかり対応できるように検討してもらいたいと思います。

その上で、今、時間雨量 50 ミリから 60 ミリ対応ということでお話がありました。そうは言いながらも、最近の豪雨等を見ると、50 ミリや 60 ミリ以上の時間雨量があるという現実があります。こういうことに対しては、県としてどのような対策を行っているのか、何か所感があれば教えてください。

河川課長

県は、令和 2 年 2 月に、かながわ気候非常事態宣言とともに、近い将来頻発化、激甚化が懸念される豪雨災害に備えるために、神奈川県水防災戦略を作成し、流量のボトルネック箇所や遊水地といった効果の高い箇所の整備を重点的に実施するとともに、現況の河川施設の能力を最大限生かせるよう、河川に堆積した土砂の撤去などに緊急的に取り組むことにしています。

本県では、境川や引地川のように多くの河川が整備目標に達していない状態です。まずは、この水防災戦略に基づき、早期に効果が発揮できるよう工夫をしながら、現在の整備目標の達成を目指して整備を加速させていくことが重要であると考えています。県では、今後とも水防災戦略に基づいて、水害対策にしっかりと取り組んでまいりたいと思っています。

渡辺(ひ)委員

今の答弁は、そのとおりだと思います。しっかりと様々な対応をお願いしたいと思います。

ただ、その中で、県民目線で聞くと気になる答弁があります。どういうことかということ、100 ミリなど、非常に多くの時間雨量が降るケースが出ている中で、現在、県としては 60 ミリを目指して整備を進めていると、それについては前向きに加速していくという答弁をいただいたので、それで許容するわけですが、要は、進捗状況とは別に、県が目指すべき降雨量については、これだけ豪雨が続いている中なので、県単独で決める話なのか、国と連携する話なのかは別にして、進捗とは別に目指すべき時間雨量については、そもそも見直しをする必要があるのではないかと思うのです。

当然今までの状況の中で、当初、時間雨量 50 ミリだったものを 60 ミリに見直しできたということ。それはそのときの気候状況等を反映して改定した

のだと思います。そういうことからすると、昨今の状況、また今後の状況を見たときには、さらなる目標値の見直しが必要かと思います。この辺りについてはどのように考えているのか、またどのように取り組んでいくのか、答弁願いたい。

河川課長

例えば、境川については時間雨量 50 ミリ、60 ミリクラスの改修をしている河川でして、それは県内ほとんど全ての河川なのですが、神奈川県の方針で、河川法に基づいて定められている河川整備基本方針と河川整備計画というものがあまして、将来の河川のあるべき姿を示しているところです。その計画では、今の時間雨量 50 ミリ、60 ミリよりももう一段階高い対策を持っています。

例えば、境川で言いますと、時間雨量何ミリというような計算ではないのですが、100年に一度の雨に対応するものとか、50年に一度の雨に対応するものとか、そのようなもう一段階先の計画、我々はよく将来計画という言い方をしていますが、そういった河川整備計画を持っています。その計画が、最終的に我々が目指しているものです。

ただ、その段階にはなかなか一気に移ることができません。河川の改修は、基本的には下流から行いますので、整備中のところをもう一回下流から整備するという話にしてしまうと、上流側がいつまでたっても整備率が上がらないという状況になります。そういうことから、まずは今の整備目標を加速させて、しっかり取り組んでいくことが重要だと考えています。

一般の気候変動に関する考え方なのですが、これは今国のほうでも十分な議論がなされています。河川の計画というのは、過去の統計データを基につくらせていただいているものですが、今後は、将来の増加する雨の予測も含めて、計画を見直す場合と見直さない場合があるのですが、国のほうでは検証していくような動きがあります。県では、今現在まだそういうところまで踏み込んでいませんが、今後は、国のそのような動きをしっかりと勉強させていただきながら、必要な対応を取っていきたいと考えています。

渡辺(ひ)委員

今、50年に一度、あるいは100年に一度というものを射程に入れて整備に取り組んでいくという答弁があったので、取りあえず安心しました。そうは言っても、時間雨量 60 ミリ対応ですらなかなか対応が大変な状況だと思います。昨今のそういう状況を踏まえた取組を、今後はしっかり対応していただきたいと思いますし、国のほうの方針等が変更になれば、それに伴った計画変更等もしっかりお願いしたいと思います。

先ほど、私は境川と引地川の進捗によって、何ミリ対応ぐらいまで進捗しているのかという質問をさせていただいたときに、何ミリ対応ということについては、様々な流域の対応等もあるので、なかなか答弁できないという話がありました。それはそのとおりだと思いますが、当然、川だけではなくて、川に流れ込む流水、例えば、雨水や下水などの対応がしっかりできないと、実際は、どのような対応で何ミリ対応になってくるか測れないということだと思うのです。

そうなってくると、県が整備をする河川対応だけではなくて、市町村が対応

する内水を含めて、この氾濫対策がどのように進んでいくのかということも、しっかり総合的に進捗させていかないと駄目だと思うのです。その視点で少し教えてほしいのが、私は先ほども言いましたが藤沢市が地元なので、藤沢市の内水氾濫対策、雨水整備がどのような状況になっているか、もし分かれば教えてください。

下水道課長

藤沢市では、内水についてはおおむね1時間に50ミリ降った雨を川や海などに流すための雨水管路を整備しています。市街地や過去に浸水被害を受けた地域などから優先的に進めている状況でして、全体面積では約7割程度の進捗状況になっています。

また、令和元年の台風の際などにバックウォーターという状況が川崎市などでありましたので、雨水管渠と境川や引地川の接続点というところについては、電動あるいは手動操作による回転ゲートを設置することとしております。藤沢市全体では34か所が整備済みとなっております。

渡辺(ひ)委員

今の視点は、非常に重要な答弁だと思うのです。先ほど県のほうの河川の時間雨量の話を見せていただいて、50ミリ、60ミリという話でしたが、藤沢市の状況を聞くと、これは当然高い目標があるのかもしれませんが、現状で藤沢市が目指しているのは時間雨量50ミリ対応ということでした。その辺りも県と市でしっかり整合を図っていかないと、要はバランスが取れないと思うのです。そういったどれぐらいの雨量に対応できるのかの整合をとらないと、県が管理する川と内水面との対応ができないと思うのです。これはしっかりと両方とも調整を図りながら行っていただきたいと思います。そこで、その辺りは県の内水面の取組と、県の雨水対策との整合は取れているのでしょうか。

下水道課長

公共下水道の事業は基本的に市町村でして、県として全部50ミリ対応で一律行うような考え方は取っていませんが、結論から言いますと、県内の市町村はおおむね時間雨量50ミリ対応を目指して下水道整備を進捗させています。

渡辺(ひ)委員

もう少し聞きます。先ほどの河川について言うと、県は以前、かながわセイフティリバー50とあって、時間雨量50ミリに対応してきました。それで、昨今はそれを引き上げて60ミリ対応にしてきました。さらには60ミリ対応しながらも、50年、100年の雨量に対する対策も射程に入れているという答弁が先ほどありました。

それに対して、今の下水道関係の各市町村が時間雨量50ミリというのを、数字だけで物を言いたくはないですが、その辺りからすると少し整合が取れてない気がします。もう一度、数字の乖離についてどのように考えているか、答弁願います。

河川課長

引地川と境川については、実は昭和50年代から総合治水対策という対策を行っていきまして、下水道とか流域の対策とか河川対策とか、全てを含めて浸水被害対策を行うという形を取っています。

今回、時間雨量を 60 ミリ対応に上げた一つのきっかけは、下水の対応です。下水道が時間雨量 50 ミリで整備していて、河川のほうがそれ以下の整備水準であると、下水道の水を河川に吐き出すことができません。せっかく幹川が整備されても、河川へのはけ口のところで絞られるような状況が生まれてしまいます。そういうことがないように、市町村の下水道部局も我々も入っている流域協議会の中で話し合いをして、結果として河川のほうは時間雨量 60 ミリ、下水道のほうは時間雨量 50 ミリで整備をすることで方向性を決めました。少なくとも境川と引地川については、そういう話し合いの下で整備が進んでいる状況です。

渡辺(ひ)委員

今の答弁で時間雨量 50 ミリと 60 ミリの関係性が理解されたと思います。しっかり各市町村との連携の下、取り組んでいただきたいと思います。最後にそうは言いながらも、市町村の内水氾濫対策が進まないといけないと思います。それについては先ほどの答弁で、一義的には市町村の取組ということですが、県の役割もあると思います。そこで、県としてはどのようなことを行っていくのか、答弁願います。

下水道課長

県では多額な費用を要する雨水整備に、まず十分な交付金が受けられるよう、また雨水整備の促進のための交付金の対象範囲が広げられるように、国に対して様々な機会を捉えて働きかけていますし、これからも働きかけていきます。

また、雨水対策を実施する市町村の職員を対象に、勉強会を定期的で開催し、自治体支援の方策や先進的な取組事例を情報提供するなど、技術的支援を行っています。令和 2 年 5 月には、先ほど申し上げた川崎市の事例の検証結果が出ましたので、これを踏まえ、より有効となる方策を各市町村にも伝えてまいりました。今年の台風シーズンまでの危機管理対応としては、主に短期的に対応しなければいけないゲートも多くありましたので、点検などについて市町村に要請しました。藤沢市からは、全てのゲートにおいての点検が完了したという報告も受けています。県としては、市の雨水対策が促進されるよう、引き続きしっかりと取り組んでまいります。

渡辺(ひ)委員

時間がないので、質問はこれ以上はしませんが、ひとつ感謝を申し上げたいと思います。今、答弁の冒頭にあった引地川と境川について、特に、遊水地の整備が着々と進んだおかげで、昨年の令和元年の台風第 15 号、第 19 号のときは、ぎりぎりまで水が上がりましたが、おかげさまで氾濫せずに済みました。過去には多くの被害が、何度も出ていました。そのエリアに被害がなかったことについて、県の取組に対して感謝を申し上げ、また併せて、今後の取組を促進していただくように要望させていただいて、私の質問を終わります。